

会 議 録				
平成30年度第2回 生活支援事業協議体	日 時	平成30年9月20日(木) 14時00分～16時00分	場 所	前原暫定集会施設 B会議室
事務局	小金井市福祉保健部介護福祉課			
出席者	委員	高良委員長(東京学芸大学) 近江屋委員(ボランティアセンター) 森田委員(また明日デイホーム) 清水委員(民生委員児童委員協議会) 高橋委員(さくら体操リーダー) 第2層コーディネーター 黒松氏(小金井きた地域包括支援センター) 金子氏(小金井ひがし地域包括支援センター) 馬場氏(小金井みなみ地域包括支援センター) 雨宮氏(小金井にし地域包括支援センター)		
	事務局	濱松、田村、松原、藤田(介護福祉課)		
傍聴の可否	◎可・一部不可・不可		傍聴者数	
傍聴不可・一部不可の場合の理由				
次 第				
1 開会 挨拶 鈴木高齢福祉担当課長				
2 議題 (1)報告事項 ① 資源情報冊子「シニアのための地域とつながる応援ブック」作成状況 ② 6～8月分生活支援連絡会報告 ③ 今年度活動進捗報告(にし・みなみ) (2)検討事項 ① 担い手不足について ② 「シニアのための地域とつながる応援ブック」の周知アンケート集計結果より、今年度応援ブックの周知について ③ 生活支援コーディネーターの周知について				
3 その他 次回協議体の開催予定				
4 閉会				

1 開会

(高良委員長)

皆様、こんにちは。雨がまた降ってきて、足元も悪い中、そしてお忙しいところを御参加いただきまして、どうもありがとうございます。

これより平成30年度第2回になります「生活支援事業協議体」を開催したいと思います。

2 議題

(1) 報告事項

①資源情報冊子「シニアのための地域とつながる応援ブック」作成状況

(田村)

平成30年度版の応援ブックにつきましては、現在、印刷をしているところです。本年度は発行部数を5,000部としまして、また地図の掲載を行いました。地図につきましては、小金井市全体の地図と各包括のエリアごとの地図を載せていまして、地図部分はカラーになります。地図のところにはそれぞれの活動グループの記載と何ページに載っているかわかるように一覧の掲載もしております。

活動の様子が見える写真の掲載も検討していたのですが、写真の収集が間に合わなかったため、今年度版は写真の掲載を断念することと致しました。来年度版以降で活動の写真の掲載を行えるように調整していく予定です。

9月末には応援ブックができ上がりますので、10月より配布を開始していく予定です。昨年度より発行部数を大幅に増やしていますので、配布先も増やせるように検討していきたいと思っております。

まだまだ一般市民への周知度が低いと言わざるを得ない状況ですので、今後の周知については後ほど検討事項2のところでも協議をお願い致します。

②6～8月分生活支援連絡会報告

(田村)

前回の協議体後の6月の連絡会では社会福祉協議会の阿久津委員と近江屋委員にも御出席いただきまして、社会福祉協議会で行っている地域懇談会ですとか、ふれあいいきいきサロン等の事業や活動について共有させていただきました。

7月、8月の連絡会では、主に応援ブックの構成についてですとか、お元気サミットでの生活支援の内容について話し合いを行いました。今年度のお元気サミットは生

活支援コーディネーターのみならず、各方面の関係機関に御協力いただきまして、ともに企画をつくり上げていく予定になっております。

③今年度活動進捗報告（にし・みなみ）

（雨宮氏）

小金井にし地域包括支援センター、雨宮と申します。

にしのエリアの活動報告を致します。お手元の資料2点をご覧ください。

平成30年度にしのエリアでは楽しみのある地域をつくるという課題で3点ほど挙げております。その3点につきまして進捗状況を報告させていただきます。

まず、歩いて行ける居場所の選択肢を広げるところなのですが、ぬく井の杜という特養のホールスペースを借りて、新たにさくら体操を10月から実施することになりました。こちらは介護予防ボランティア養成講座の卒業生を中心に活動を実施していく予定です。今後はさくら体操だけでなく、音楽活動のボランティアさんとともに、コンサートや歌の会なども検討していきたいと考えております。

次がまちの縁がわわ・おん。こちらは皆様にお配りしております資料をごらんいただくとわかりやすいかと思えます。手づくりランチとカフェのお店になりまして、貸しスペースとほっとサービスというちょっとした困りごとの手助けなどもしていただけるようなところになっております。この貸しスペースを利用して哲学カフェといったものも開催されておりまして、男性の居場所にもつながるかなというところで新しい発見をいたしました。

3点目はおしゃべりサロンいこいの家。こちらは社協のボランティアセンターさんと地域福祉コーディネーターの方とともにこれから開始していく予定です。今はまだ準備段階ということで活動の支援を行っております。

社会資源としての学芸大学の活用という部分なのですが、こちらはまだ実施予定ではあるのですが、大学の構内を散策しようという企画を計画しておりまして、できればハビリ職の方にも参加していただいて、歩きながらアドバイスを頂いたりということを検討しております。ウォーキングをすることが目的になっております。ただ、こちらに関しましては計画途中で地域の知識のある方や社協さんにも相談したところ、今後定期的に開催するようであれば、ちゃんと学芸大学に正式に申し入れをしてお話を通したほうがいいのかというアドバイスをいただいております。今後高良先生のお力も借りながら進めていきたいと思っております。

もう一点、学芸の森の講習会のお知らせというものがあるのですが、こちらは高良先生から情報を頂いたものです。学芸の森というプロジェクトがあって、その中で対象者のところに地域住民も入っております。今後こういったことについても

活用を検討していく予定です。

3点目、ちょっとボランティアが必要というところで、ちょっとボランティアについてなのですけれども、今年度の小地域ケア会議で他市の実践している助け合いの活動についての講話を検討しております。また、地域ボランティアの会の会長様より現状を伺っておりまして、11月に地域ボランティアの方、会員様向けに地域でどのような要望があるのかというお話も生活支援コーディネーターの私からお話をさせていただく予定となっております。あとはボランティアセンターさんから協力を得て、個人で活動している方々の情報を教えていただいている状態です。

今回この協議体でアドバイスをいただきたいことがあるのですけれども、さくら体操を始めて10年が経って、リーダーの方がだんだん年齢が上がってきまして、リーダーの高齢化が問題になってきて進んでいるということです。あと地域ボランティアの会の会長さんともお話をしたのですけれども、ボランティアの方々の年齢も上がってきているところで、60代とか70代といった元気高齢者との関わりをどうやらもうちょっと増やしていけるのかなというところで、お知恵をいただけたらと思っております。

(高良委員長)

最後のところで言っていたことはどこでも課題ですね。大きなポイントだと思います。これは御検討いただきたいと思いますが、その前に1つ学芸大学のほうだけ先に忘れないうちに伝えさせてください。

まず、御連絡いただきましたように、一応この中は散策する場合も、多分学芸の森の施設関係の課だと思うので、どこに聞けばいいかを私のほうから確認して雨宮さんにお伝えしたいと思っております。

(高橋委員)

先ほどリーダーという形が始まって10年ということで、私で7年ぐらいになりますが、この7年の間にもやはり会場のリーダーさんの中で、御自身の高齢というよりも御家族の諸事情が新しく発生されてしばらくお休みさせていただきますという方とか、その後、おうちのことで戻ってこられないという方がいらっしゃるのですが、あとはロコミで、特に私の行っている社協の2階のところなどは公団が近いので、公団住宅にお住まいのおひとり暮らしの方が多いです。そういう方たちがお友達をつてにして、1人リーダー講習会に行ってみて、自分のところの団地でリーダーをやってみて、あなたもやりなさいよ、楽しいわよということで、私の会場の中では人が減っているところを少しカバーして交代して、人数は増えてはいないのですが、ぎりぎりキープできているみたい。やはり人から人への情報の提供で、じゃあ私もやってみようかしらという、年齢というよりはその方個人のお元気度みたいところで、私も何か役に立つことをやりたいわという人は実は潜在的にはいらっしゃるのではないかと思います。

す。そのつながりの仕方みたいなものをどういう形でつくっていくかという、コア、核になる人たちに向けて広がりをつくっていくような情報提供の仕方、輪を広げていくという、本当に個別個別でつながっていくのは結構大事なことはないかなと思います。

(高良委員長)

すばらしい御意見だと思いますが、なかなかそこが難しいですよ。仲間同士でというか、あの方だったらやりそうだからみたいな雰囲気であってお声がけして下さるのはすごくありがたいし、それで広がっていくのが一番いいのだと思うのですが、なかなか最初にどの方がキーになってくれるのだろうかというのを見出すのは難しいですね。

(近江屋委員)

サブスタッフとかだと多分謝礼が出ていますね。さくら体操のリーダーは完全に無償なのですか。多少何かつくるとやる気が出るのかなとか、あと最近ふれあいいきいきサロンという事業をやっているのですけれども、すごく若いお母さんが自己実現のために例えばヨガのインストラクターとかハンドマッサージの資格を取って、とりあえずママたちの居場所をつくりたいみたいな感じで、結構ことしになって3つ4つできてきているのです。すごく熱心で、その中には多世代交流もできたらと居場所をやったりしている方もいるのですけれども、ほとんど若いお母さんばかり、赤ちゃん連れだと、お年寄りはどうぞと言ってもなかなか来づらいつらい感じではあるのですけれども、そういう若い人たちがさくら体操のリーダーと思うとちょっと踏み出しづらいのですけれども、何か仕掛け、リーダーの免許証とかキャリアになるものがあれば、そういう若いお母さんたちも、若い人がリーダーになっても別にいいのですよね、高齢者だけではないのですよね、きっと担い手になってくれるのではないかという気はしますけれども、かなり仕掛けが必要かなとは思っています。

(高良委員長)

若い方がリーダーになると、多分今度集まれる方がどこまで集まれるかという課題があるかもしれないです。あと若い方なのか、年代にもよりけり、個別性もすごくあるのだと思いますけれども、さくら体操のリーダーをやることに何をやりがいだと感じられるか。多分かなり年齢によっては違いがあるような気がするので、どういうふうな形で動機づけをしていくかみたいところは違ってくるような気がします。いろいろな形で多世代で交流できる場に、どの年代の人も行きやすい状況をつくるというのは必ず必要なことだと思います。

(森田委員)

新しい人が常にちょくちょく顔を見せてくる、新しい人につながってくるというところでいくと、先ほど高橋委員がおっしゃられたような、さくら体操メインだけの時

間よりも、その後の何かがそれぞれのさくら体操のグループの楽しみの中核にはなり得るのかなと聞いていて思いました。ワンコインカフェもそうですけれども、そこに楽しみとして多世代とか赤ちゃんがいるとか、60代70代、御年輩になってさくら体操のリーダーはちょっと大変になってくる年代よりも1世代下の方々ですと、ちょうど子育てが終わって、孫育てもちょっと終わってくるのかなという年代だと思いますので、全く自分の血縁もないので、ちょっと言葉は悪いですがけれども、若い方たちに無責任な立場でアドバイスできて、子供の成長も楽しめるというような楽しみ方も人が集まる1つの要因ではないかなと思いました。

(高良委員長)

どうもありがとうございました。

次はみなみさんをお願いしてもよろしいでしょうか。

(馬場氏)

みなみ地域包括の馬場と申します。

皆様のお手元にあります小金井市地域課題対応活動計画(みなみエリア)を見ていただけたらと思います。

今年の活動目標「地域住民が感じる課題を把握する」「認知症について正しい理解と対応についての周知を図っていく」「既存の居場所のフォロー」「出かけるきっかけづくり」というところで、手段の「①小地域ケア会議」では、今年5月に貫井住宅の住居者向けに自治会の方、社協の方、包括連携で防災めぐりを行いました。これをきっかけに自主防災組織がないことや、若い担い手がないことなど、いろいろな課題が上がりました。この課題はほかの地域でも言える共通した課題ということもあり、ことしの小地域ケア会議のテーマは「災害に備えてみんなで考えてみませんか」という内容を予定しております。日にちは9月27日木曜日、午後2時～4時を予定しております。

「②啓蒙活動の一環で定期的に認知症相談会の場を設ける」というところでは、今年5月、7月、11月、3月の第3火曜日開催を組んでおります。ですが、今時点で5月、7月参加者はゼロ人という状況でした。

「②啓蒙活動の一環で認知症サポーター養成講座を利用者家族や町内会などで伝える」というところでは、6月、7月の間に市内13カ所のサロンやさくら体操会場に出向き、認知症ガイドブックなどのPRを兼ねて講座の御紹介を行いました。実際講座を開いたのはそのうちの4会場です。講座を開いての反応としましては、さくら体操でコスモス会場の参加者の方々は年齢が高く、認知症当事者の方もいらっしゃることでして、当事者の方から貴重な御意見も聞けて興味深かったというお話がありました。また、認知症ガイドブック配布では、どこの会場でも共通するのですが、どんなに騒いでいる会場でも、ガイドブックができ上がりましたとインフォメーションを始

めると、皆さんしんと静まり、お話をよく聞いてくださいます、関心の高さがうかがえました。

「③居場所の周知活動や、参加者には情報提供などを行い、サロンの継続ができるように支援していく」というところでは、あんず苑の軒下マーケットの周知では町内会の回覧板にチラシをつけて回してもらったり、認知症の方の介護をしている家族の方には家族会の紹介をしたり、ダンスをしたいと希望される方には市内で活動しているサークルの紹介を行ったりしました。また、サロンには情報提供を行い、例えば市内にあるおにぎり屋さんをサロンで紹介したところ、参加者の方が別の活動があったところでおにぎりをたくさん注文してとても便利だったという報告も受けております。また、既存のサロンはそれぞれ工夫もされていまして、固定した参加者がふえたことで、どこの会場も今のところでは軌道に乗っているところです。ほかにさくら体操の自主会場が2カ所、コンフォール貫井とアプリコという有料ホームで9月から月1回活動を開始予定ですので、歩いて行ける集いの場が増える予定となっております。

最後に「シニアの応援ブックの周知」のところでは、サロンで配ったりしております。皆さん、こんなものがあるのねというような反応でして、まだまだ知らない方が多い現状なのですが、興味を持っていただいているところです。

みなみの課題としましては、ここ最近男性の独居の方が家事能力がとても低くて、長い間近隣の方とのつながりが薄いので、ごみ屋敷化したり、アルコールに頼ってしまったり、外に出ないので廃用症候群になってしまったりという方の数がふえているところでして、こういう方々を早目に地域で発見できたらいいということで、もう少し支援につながる方法とか担い手をふやしていったり、つないでいく必要があるのではないかと感じているところです。

以上で報告を終わります。

(高良委員長)

ありがとうございました。

まず最初、認知症相談会の参加者がゼロだとおっしゃられたので間違いはないでしょうか。

(馬場氏)

参加者はゼロです。

(高良委員長)

これは原因として何か思い当たる節はありますか。

(馬場氏)

認知症相談会という名前で募集をかけますと、タイトルに抵抗感があるのか、なかなか相談するというところでこの日を特別に狙って来ることはない状況です。ただ、実際相談を受けるところでは連日電話で認知症のことでは報告を受けている状況です。

(高良委員長)

ありがとうございます。

せっかくやってくださっているのにもかかわらず、参加されない、でも実際は相談されたい方がいらっしゃることを考えると、ネーミングを変えるのか、何かほかのやり方をするのか、いずれにしても本来のニーズはあるわけですから、そこがうまくぴったり当たるような形にするにはどんなことが考えられますでしょうか。ほかの包括さんも、こんな方法だったら割と来ているよというものがあれば。何かいい案はありませんか。

(森田委員)

いい案では全然ないのですが、先ほどみなみ包括の馬場委員からもお話がありましたとおりに、認知症相談会という、会場があってそこに出向くというよりは、先に電話してしまったほうが、包括さんには毎日電話があるということですので、わざわざその催しに出向くというよりは、常日ごろから認知症のあれこれを吸い上げられる仕組みがあったほうが、それで事足りるような感じでもいいのかなども感じました。例えばですけれども、それこそさくら体操のいろいろなグループがある。でも、そこには御夫婦でその地域にお住まいでも、そのどちらか、主には女性の方でしょうが、集まる。そこがいわばさくら体操などのサロン化のような形にもなって、そこで伴侶のいろいろな不安、不満、認知症なのかしらというようなそういった情報が結構行き交っているかもしれない。それを吸い上げるきっかけにならないかなと感じました。

馬場氏)

最近認知症の方がふえていて、間違っというのですか、マイナスのイメージがあったりするのもありまして、日ごろ包括支援センターが相談機関としてやってはいるのですが、それを改めて認知症相談会とタイトルをつけることで、そういうことが相談できる場をもう少し広めていけたらということによってこういう場を設けさせていただいております。

(高良委員長)

確かに認知症のことをここに相談していいのだと認識してもらえるとという意味においては、こういうふうに名前をつけてやられるのは1つ大切なのかなと思いますが、それであればあえて相談会という形をとらなくても、認知症の相談はここでできますよみたいなものが周知できればいいのではないかという気がするのです。もしくは認知症のことについて御不安な方は本当にいっぱいいらっしゃるわけですし、そういうことを考えると、割と予防的な視点からだと多分どなたでも抵抗なく入っていけるような気はしますが、何かほかの包括さんでこのあたり、認知症に関連してこういうふうな工夫をしてやっているとかがあれば共有していただいでよろしいでしょうか。どうでしょうか。

(金子氏)

ひがし包括の金子と申します。

認知症に特化してというところでは、今、ぱっと思い浮かばないのですが、これまで介護予防相談会は包括で設けておりまして、過去に地域支援事業が行われていた地域の予防相談会においては啓発ができていたのか、申し込みもあったのですけれども、ここ何年かはやはりお申し込みが介護予防相談会もない状況でして、ひがし包括ではそういう現状を踏まえて出向いてという形をとりまして、ことしに関しては7月、包括から出て違う場所で予防相談会を行いました。ただ、それだけでは集客につながらないだろうというところで、リハ職の方に協力をいただいて介護予防にまつわる講座プラス予防相談会という形で行いまして、具体的に相談には余りつながってはいないのですが、集客ということでは10名参加されていたということで、結果としてはプラスアルファの要素が必要なのかなというところではあります。

それと認知症カフェとうたってしまうとなかなか行きにくいところがあって、認知症カフェのスタイルで当センターが行っているなごみカフェは、ちょこっとそんなフレーズも入れつつもどなたでも御参加くださいという形で行っているのですが、どちらも昨日行ったなごみカフェでは18名が御参加されていたのですけれども、昨日は災害について消防署の方に講義していただいてというところをプラスしているのですが、認知症と全面にうたってしまうとなかなかハードルが上がってしまうのかなというところと、プラス何かをつけると行きやすさは出てくるかなと感じています。

(高良委員長)

ありがとうございます。

認知症とつけることによって明確に本当にそのニーズのある方が来てくださるという要素もあるけれども、逆にやはり行きづらいぞというところも出てくるという非常に難しいジレンマのところだと思いますが、おっしゃっていただいたように介護予防相談会みたいに、要は認知症だけではなく、もっと大きい概念で言葉を使ってお伝えしていくとか、やはり森田さんもおっしゃっていただいたアウトリーチしていくことです。さくら体操の終わったところに行くとか、何にしろ皆さん多分興味をお持ちなのだろうと思うところに行く、プラス何らかのプラスアルファの要素も加えることによって、認知症だけではないのだけれども、でも実は認知症のこともちゃんと中に入れながら話をしていくと、そのところで本当は認知症のことを聞きたいと思っても何となく行きづらいみたいな人たちも来られるという、そういったところを意識して相談会なんかを設けていっていただくと、せっかくやっつけたいところにもったいないので、もう少し本当に必要な方に届いていくのではないかなという気がします。

もう一点のところでお話しいただきました男性の独居の方、これはもう本当にどこ

もそうです。小金井市に限らない、みなみさんに限らないことではないかなと思いますが、こういった方々は本当に孤立している方が多くて、いかにつながるのか、発見するのか、難しいテーマだと思いますけれども、何かいい案とか言うともたししゃべりづらいですね、これまでの御経験上、何かこういったことがあるのではないかというものがありましたらお伺いいたします。

(高橋委員)

個別の声かけというところでは、例えばさくら体操なんかに来ていて、あの方、このごろ来ないわねと。なかなかさくら体操は男性の参加が少ないのですけれども、数人、1回に1人2人3人くらいの感じでいらした方が来なくなっていく。そうすると何となく御近所の方は、何々さん、足が悪くなっちゃって、この間階段を上がるのが大変だったのよねと、何となく情報が入ってきたり、男性が来ると、みんなどこか気にかけているのです。特におひとり暮らしだったりすると、このごろ来ないから来なくちゃだめよとお節介なおばあさん感覚の声かけをして、私たちも気にかけているのよというのを男性の方に伝えている。そのお節介が必要なのではないかなと。声をかけてもらおうと、多分声をかけてもらった側も、ああ、気にしてくれているんだな、この間は行かなかったけれど行こうかなと、そんなような効果は実際あるように見て思いました。やはりお節介が必要な。

(森田委員)

今、高橋委員がおっしゃっていたことだと、実は私の母が地元で民生委員をやっているのですが、ちょうどこの前大阪の北部地震が私の地元で、急遽帰って、母と一緒に地域を回ったのですけれども、民生委員なのでどこにどんな御高齢の方がいて、おうちの中も上がり込んでしまっているの、どこに何が入っている、だからあそこの家はこの地震だとあのたんすが崩れているのではないかというのは把握している。高橋委員がおっしゃるように、誰かそのお宅の状況ないしは存在を知っている人が地域にいと、もちろん独居の男性も何軒かありまして、しかも新興住宅地なので皆さん一軒家なのです。だからおっしゃるように誰かがお節介を働かないと、もう孤立しているのかどうか、そこが空き家なのではないかというような感じのお宅も多くて、ずかずか入っていける人、人材が地域に1人いらっしゃることにかかってくるのかなと。

あと私も齢50を数えましてそろそろ初老の時期に入ってくる年代としては、どうしても男性は新しいつながりはやはり億劫というか、嫌だというか、ちょっと拒否的なものをお持ちなのかなと思います。そこに例えば新しい関係をつくる時は、集団対その男性よりは、個人的にお裾分けでも、元気とか言う、あんたの言うことだったら聞くよという男性のほうが、御高齢の、それこそ偏屈な爺さんには多いかな。私もみなみ包括、洋さんと同じ地域なので、気になる人、例えばあの方とか、その方々は

包括さんがちゃんと把握されていて、かつみなみ包括地域はもともと1人親方タイプの農家であるとか大工であるとか土建屋さんとか、集団にはなじまない方が多いのでなおさら御苦労が多いのだと思います。ましてやその方が隠居して、おうちでいばり散らしながら、奥さんをこき使ってしまったようなケースがあって、そういった場合でも可能性としては個人のほうがそこにつながっていけるかなとは考えました。

(清水委員)

私なんかは日常の生活というか、活動の中では高齢者で1人で住んでいる人がどういう人とつながっているかは注意しながらいつも活動しています。つながっているというのがわかれば、この人もある程度安心してしまうというか、何かあると誰か来てくれるということがあるので、誰ともつながっていない、絆がない人に対しては活動の中で一番注意が必要だということだと、自分はそういう気持ちで活動しています。やはり誰ともつながっていない人が一番怖いですから。

(高良委員長)

本当につながっていない方で男性で独居でここに住んでいるなというのは、民生委員さんはおわかりになっているのですか。

(清水委員)

大体は。

(高良委員長)

では、民生委員さんと連携するのが一番。

(清水委員)

本来は包括の人と民生委員は密接になりたいのですが、どうも包括が非常に忙しいらしくて、民生委員が遠慮してしまっている状態で、会議も前は真面目にやっていたのですが、回数も減らす方向で、そういう話になってしましまして、余り人を呼ばないようにするとか、そういうふうにしていいのか私もわかりませんが、本来は密接につながっていたほうがいいのではないかと思います。今日からまた高齢者の訪問が始まっているわけです。70歳80歳の。本来はそれが終わると10月以降、11月ごろに各包括の人あるいは社協の人がそれぞれ集まって会議なんかをやるのですが、その情報交換をやるのかまだ私もわかりませんが、本来はそういう情報交換をしていったほうがいいのではないかと思います。どうなるかわかりませんが、その辺は民生委員から声をかけていくのか、包括のほうから声をかけるのか、あるいは地域福祉課がリーダーになってやるのか、それは私もわかりませんが、いずれにしても包括の人が忙しいので、遠慮している状況に私どもがあることは事実です。そうすると情報が前と比べたらお互いに少なくなってしまうのかなという感じを持っています。10月も町別を本来はやるという話があったのだけれども、ほかの勉強をしたいから自分たちだけでやるという話が出て

きてしまったのです。その辺はいろいろ難しいところがあります。

(高良委員長)

包括さんとしてはどうなのでしょう。むしろもっと連携したいのかなのかどうなのか、私もよくわかりません。

(清水委員)

それは参加者、地域によって、地区によってちょっと違いもあるのです。要するに3つの地区に分かれていますから、北部のほうは今、そういう状況にある。私は北なものですから。

(高良委員長)

みなみはいかがでしょうか。みなみで場所は違いますが。

(馬場氏)

今、清水委員からお話を初めて聞いたような状態で、それほど民生委員さんの間で遠慮されているという状況は気づかなかったところで、確かに包括内で仕事、今、要支援のケースが委託を受けていただける事業所さんが少なくなっているの、包括の職員の中だけで予防ケースを持ったり、ほかにも総合事業もあって、時間を取るのも大変になっているところもあるのですが、ただこういう高齢のなかなかSOSを出しにくい方に一番気づいていただける方がやはり民生委員さんとかコンビニエンスの方とか医療機関とか、日ごろ生活の中でつながっている方々から連絡をいただけることが大変貴重なというのでしょうか、最初の入り口のところで重篤化を防ぐということがあるので、できれば民生委員さんの包括は忙しいというのはあるのですけれども、大変貴重な御意見をいただける場なので、声かけというのでしょうか、御連絡をいただければとは思っております。

(清水委員)

私もそういうふうにしたほうが良いと思います。

(高良委員長)

小金井市として何らかの仕組みみたいなものをつくったほうが良いという御意見はございますか。中でも民生委員さんと包括との連携について。

(清水委員)

連携は前は必ず年に2～3回やっていたのですけれども、今はきたについてはほとんどやっていない。だから今日黒松さんは会議が重なってしまって、私はこっちに来たのですけれども、ほかでもやっているわけです。その連携がどうなっているか私はわかりませんが、前よりは少なくなっている。ですから、多くの民生委員の人が、包括はどなたがいるか名前がわかりません。しょっちゅうそういうつながりを持っていないから。

(高良委員長)

これに関しては別に小金井市がそういうことをやるためにわざわざ何かしなければいけないみたいなことは何もないですよ。連携するということで自由に動いていいわけですよ。

(濱松包括支援係長)

民生委員さんの町別ネットワークに包括の方が出席するというのは、清水委員がおっしゃいましたけれども、基本的には地域の会長さんたちの判断になってくると思うのです。ただ、おっしゃっているとおり、私も町別の会議に包括の方と市の職員が出席させていただいていたのかなという認識だったので、実は今、伺って、町別に包括の職員も市の職員も出ていないということで、地域によって違って、恐らくほかのエリアは包括の職員が呼ばれていると思うので。

(高良委員長)

今回1つの課題がここで明らかになりましたので、もちろん包括さん、ほかのきた以外のところは町別の会議にも参加してくださっているということですが、できればもう少し民生委員さんに、大丈夫、我々は忙しそうに見えますけれども、もっとちゃんと連携しましょうねみたいなところの声かけをしていただくとともに、きたに関しては黒松さんがいらっしゃってからになると思いますが、連携をして町別のほうにも出ていただく。そうすると、特に行政の方、行政職員の方も参加していただくという形をとっていくということでお話し合いをしていただければと思います。すみません、また黒松さんがいらっしゃってからそのところは確認したいと思います。

(2) 検討事項

① 担い手不足について

(高良委員長)

では、検討事項に入っていきたいと思いますが、①の担い手不足につきましては先ほどにしから御報告いただいた際に御検討いただきました。これ以外に何か担い手不足に関しまして課題があるのだとお気づきの点や、もしくは逆に対応としてこういったことが必要ではないかという御意見がありましたらお願いいたします。

よろしいですか。では、必要がありましたらまた戻ってきたいと思います。

② 「シニアのための地域とつながる応援ブック」の周知アンケート集計結果より、今年度応援ブックの周知について

(田村)

「シニアのための地域とつながる応援ブック」の周知につきまして、応援ブックに

掲載しております活動団体代表者等の方を対象にアンケートを実施させていただきました。アンケートの集計結果につきましては、資料として皆様のお手元に配付しておりますので、そちらを御参照いただきながら結果について御報告させていただきます。

アンケートの実施期間ですが、平成30年6月～8月に行いました。

アンケートの対象者は、平成29年度版応援ブック掲載活動団体並びに平成30年度新規応援ブック掲載団体ということで、109団体を対象といたしました。アンケートに答えてくださいました団体が71団体になります。

質問としましては、応援ブックの内容について満足度をお答えくださいとお聞きしています。こちらの紙を見ていただきまして、回答は「不満」から「満足」で1、2、3、4としておりまして、そこに回答していただく形にさせていただきました。見ていただきますと、「不満」と答えた方はゼロで、「不満」2に答えた方が7、3のところへ答えた方が29、「満足」4のところにつけた方が35ということでして、以上のアンケート結果より、応援ブックを利用させていただいている限りでは内容の満足度はおおむね高いものの、地域活動に携わっている方以外は応援ブックの存在自体を知らないという意見も見受けられました。

今年度は5,000部を発行する予定になって、今、準備しております。

現在、配布先としましては各地域包括支援センター、各公民館、図書館、保健センター、社会福祉協議会、商工会、まちおこし協会、民生委員さん、市内事業所のケアマネージャーさん等にお配りできたらと予定しております。

より周知を広めていくためにどのように取り組めばよいのか、ぜひ皆様の御意見を賜ればと思ひまして、議題に上げさせていただきました。よろしく願いいたします。

(高橋委員)

応援ブックの存在自体を知らないということはまだ本当にそういう状況で、先ほどお節介が必要という話をしましたので、例えばさくら体操に来ている利用者さんでお節介な人がいるわけです。隣の人を気にしたり、このごろあの人来ないわねと。でも、とりあえずそんな方は皆さんこの内容には興味があるはずなので、さくら体操の利用者さんにはどんどん配布できたらいいのではないかと。そうすると自分が見るだけではなくて、あら、何とかさんにこれはいいんじゃないかしらというような情報提供を自動的にしてくださる方がいると思います。皆さんがそれを非常に楽しみにして、さくら体操だけではなくて、自分がどこに行ったらおしゃべりできるかしら、この内容なら行きたいわねと言って、自分にとっても広がりがあるので、さくら体操に参加しようかなという意識のあるような人にはお配りしていただけるといいのかなと思います。

(近江屋委員)

周知はやはり課題です。活動を熱心にされている方にはすぐぱっぱと情報が伝わりますけれども、ひきこもりがちの方とかは課題かな。病院とかコンビニとかスーパーに置くとか、べたな感じもいいのかもしれないです。接骨院に置かせてもらうとか、薬屋さんに置くとか、お年寄りが集まるような場所に置くことですかね。

(黒松氏、入室)

(高良委員長)

黒松さんがいらっしゃいました。こんにちは。雨がかなり降っていますね。どうもお疲れさまでした。実は黒松さんがいらっしゃらないときに、民生委員さんと包括との連携という話が出まして、その際にきたでは民生委員さんがやられている町別会議に最近では包括さんが参加されていないのではないかとか、行政さんも参加されていないのではないかみたいな話が出たのですが、いかがでしょうか。

(清水委員)

このところも参加していないというか、呼ばれていないでしょう。

(高良委員長)

そういうことが先ほどの話の中で明らかになりまして、ほかの包括さんは皆さん呼ばれていらっしゃるようで。

(黒松氏)

最近お話し合いがないのかなと。

(清水委員)

忙しいから呼ぶのを遠慮しているのです。それはまた調整しますけれども、一応今、そういうあれがあるので、私はそれではまずいのではないかなという話をしたのです。だから今月から高齢者のほうも始めていますから、一応11月ごろにはあると思います。それは一緒にやるように私のほうでまた話はします。

(高良委員長)

ぜひともこの3者はすごく重要なポイントになるところだと思いますので、よろしくをお願いします。

③生活支援コーディネーターの周知について

(高良委員長)

それでは、最後のところ、検討事項の3番目に行きたいと思います。生活支援コーディネーターの周知について、まずは事務局からお願いいたします。

(田村)

先ほどの応援ブックの周知と関連しまして、生活支援体制整備事業、ひいては生活支援コーディネーターの周知をするために、本日配付させていただきましたこちらの

応援ブックと生活支援コーディネーターの紹介のチラシを昨年度より作成しまして、2層の生活支援コーディネーターが地域のサロンや通いの場等に行くときには持って行って配布、周知をしています。また、現在生活支援体制整備事業につきまして説明資料を作成しております。まずは民生委員さん向けに説明資料を作成しまして、順次地区ごとに説明させていただいている状況です。地域活動を行っている団体の方でも、包括支援センターの方が支援してくれているという認識にとどまっています、生活支援コーディネーターの業務としては認知度がまだまだ低い状況かなと感じております。まずは地域活動についての相談の窓口として生活支援コーディネーターがいることを知ってもらいたいと思っているのですが、どのように周知していくと良いか、皆様の御意見を賜ればと思つて議題に上げさせていただきました。よろしくお願いいたします。

(高良委員長)

生活支援コーディネーターを周知することについていかがでしょうか。

ちょっと気になったのが、すごく悲しいのですけれども、正直地域包括支援センターも余り周知されていない。まだまだ地域の中で本当に地域包括に行かなきゃとか、地域包括ってこういうところだよみたいにしつかりと皆さんに周知できているような状態ではない中で、また1つ生活支援コーディネーターという言葉を知り周知する必要性が本来あるのかどうかというところもないわけではないのではないかと気がするのです。何せ全てを片仮名にしてしまっているという問題もあり、今、地域で何やらコーディネーターというのが山のようにあるのです。高齢も障害も児童も全部何とかコーディネーターとばらばらなので、これは国の問題として整理していかなければいけないところが課題にはあるのですが、そういった中で生活支援コーディネーターを知ってもらう必要性がどこまであるのか。小金井市の場合は地域包括支援センターがそこを担っていることを考えると、別に地域包括支援センターとして理解してもらっても問題はないのではないかなという気もしないではないですが、住民からしてみるとあれもこれもあれもこれもですよね。

このあたりは小金井市さんとしてはいかがですか。

(濱松包括支援係長)

今、委員長がおっしゃったように、市の各種事業の広報活動についてやはりいろいろなことが言われています。特に行政としては伝えたいことがたくさんあるのですけれども、それぞれ受ける側にとってはいろいろなところからいろいろな情報が来るので、我々は特に生活支援コーディネーターを伝えたいというのがありますけれども、一方で我々は「認知症施策事業推進委員会」も行ってあります。そちらのほうでも同様に広報手段などが検討課題として上がっておりまして、先ほど馬場委員もおっしゃっていましたが、認知症についてもっと普及啓発を進めたほうがいいのではな

いか、そのためにはどうするか、では広報活動を進めましょうというところに落ち着くのですけれども、広報手段はいずれにせよ検討の課題になってしまうのかなと思っています。包括支援センターの業務の周知の一環として皆様の居場所づくりもやっているという整理にしていってほしい方が出し手としても受け手としてもわかりやすいのかなという部分もありますので、そういった整理ができるようであれば今後は包括支援センターの業務の位置づけとして普及の仕方を強化していくみたいな方法でもいいかなというのは、こういう形でいっていただければと思っています。

(高良委員長)

先ほどのものはあくまでも私の意見なので、実際にやっていらっしゃる皆様方はどんなふう感じられますか。むしろ生活支援コーディネーターとして周知してもらったほうがやりやすいとか、いやいや、もう包括というところで全部まとめるような形で、こんなこともできます、こんなこともできますの中の1個として周知してくれたほうがやりやすいと考えられるか。いかがでしょうか。

(黒松氏)

サロンに出向いたり、地域の方と話を1年ぐらいして見て、1年たって、何で黒松さんはこんなに来るのみたいなことを言われるのです。その説明をやはり最初にしなければいけなかったのですけれども、それを地域包括ケアシステムの中で私はこういう位置づけでというところを最初にできなくて、何となく顔が見えてきて、1年経ってやっとそういう話ができるようになった感じなのです。まずそういうふうに話をしたら、その方々は地域包括ケアシステムに興味を持ってくださって、そのシステム自体を理解して、ではお互いに利用し合うと言うのは変ですけれども、ツールとしてコーディネーターという人がいるんだねとわかってくれたのがあるのです。その辺を最初に説明するのはすごく難しいなと感じるので、コーディネーターと言われてもあちこちにいるというのはもっともだし、その辺は実感しています。

(近江屋委員)

小金井市はインテリの方が多いので、制度説明からやったほうが意外と男性とかは入ったりする。結構年配の方も高学歴が多いので、人によるのかもしれないのですけれどもね。あと地域につながりたいという若い意欲的な方たちはがっつり制度を説明したほうが入りやすい。あ、そういう国の施策が、じゃあ自分たちはこの位置づけでやっていこうみたいになりやすくなる。ただ、御高齢の方だと本当にわかっていない方も多いので。

(森田委員)

先ほどの黒松さんのお話を伺って感じたのは、それぞれ各包括の生活支援コーディネーターの方々は常日ごろ足を運んでいらっしゃる顔が繋がっている、しかも市役所の何々さんではなくて包括の何々さんというところまでは繋がっていらっしゃる

と思うのです。例えば黒松さんだと、きた包括の黒松さんだけでも、役割としては生活支援コーディネーターなんだよというところはつながっている人には伝わりやすいと思います。見ず知らずの人には生活支援コーディネーターの黒松です、私は小金井市のきた包括支援センターというところがありましてと言うと、多分頭がいっぱいになってしまうけれども、だから持っていき方として、何で黒松さんはこんなにいっぱい来ているの、実はねというのでも周知としては相手の方はわかりやすいかなと思いました。今、それぞれの方々がつながりができているので、ここから、私は生活支援コーディネーターなんですというのであれば全然わかりやすいのかな。例えば黒松さんがビラをまくとか。黒松さんがまくのですよ。

(黒松氏)

私がこれなんですと。

(森田委員)

そうそう、そんな感じでやれば、ああ、本当というので、さらに生活支援コーディネーターが何をしてくれる人なのかが入っていきやすいのかなと感じました。

(黒松氏)

まず人として入るという感じですね。

(森田委員)

そのほうが伝わりやすいかな。大事な役割ではあって、それを周知させていきたいということであれば、なおさら広く浅くではなくて広く深くのほうがいいのかなと思います。

(高良委員長)

そうなのです。余りこれでも来られても、何も知らない人に、例えばこれが入っていて、これを見て、じゃあコーディネーターに連絡してみようかなと余りならないし、理解も難しいと思うのです。そう考えると、むしろコーディネーターの方々が御自分を説明する際に活用しやすいようなチラシだったり、名刺だったり、何かそれを考えてくれたほうが良いような気がするのです。周知といっても、だーっと広く浅くまくよりも。どんなものが必要ですか。そういうつながっていつているときに、これだったらやりやすい、説明しやすいのにか、何かあれば。

(森田委員)

名刺。

(高良委員長)

名刺を作るとしたら、これは行政の名刺になるのですか。行政の名刺で、行政のほうでの生活支援コーディネーターになるのですか。というのは、ここが小金井市の介護福祉課の生活支援コーディネーターまでお気軽にお電話くださいと書いてある。そうなってくると、小金井市の者かいなと普通理解しますね。これはお住まいの地域の

地域包括支援センターが担っているということは、ただ生活支援コーディネーターはどう考えても小金井市介護福祉課にかかっているのですよ。だから包括は別物で、包括かもしくは小金井市のコーディネーターに連絡してねと読み取れますね。なので、これはもしやるとしても文面を考えなければいけないのですが、少なくとも名刺は包括の名前で生活支援コーディネーターのほうが理想的なのですか、それとも小金井市のほうで生活支援コーディネーターが理想なのですか。

(濱松包括支援係長)

確認しないとはっきりしたことは申し上げられないのですけれども、ただ予算の面からいうと生活支援コーディネーターで予算を組んで委託費を支払っているの、実施主体でいうと市になります。なので、包括支援センターの生活支援コーディネーターではなくて、小金井市の生活支援コーディネーターですという形になるので、もし生活支援コーディネーターとして名刺が必要であれば、市で刷る必要があるかなと思いました。ただ、実際その普及の仕方にもよってくると思うのですけれども、黒松さんがおっしゃった包括の職員としてやっているということであれば、当然一緒に刷っていただいても我々としては問題ないという認識になってくるだろうなと思います。

(高良委員長)

むしろ皆様方としては多分使い分けをしていったほうがやりやすいのではないかなという気がするのです。小金井市のほうでの生活支援コーディネーターという名刺も必要ですか。それよりも地域包括支援センターで生活支援コーディネーターというふうにした名刺のほうが使用しやすいですか。ちょっと作ってみますか。

(黒松氏)

でも、市の2層なのですよ。

(高良委員長)

そう。

(金子氏)

総合相談になってしまうと、生活支援コーディネーターは市が見ていったときにきつとこれは何となりそうな気もするけれども、一般的にかかわる中では認知してもらおうという意味では、通常使っている名刺の中に入っていると、名刺だけ勝手に回ってくれるのでやりやすいかなと思います。

(高良委員長)

ということは、小金井市さんのほうでつくってもらわなくてもいいという感じですか。

すぐなので、ちょっと活動の様子というか、もし小金井市の名前の生活支援コーディネーターのほうがやりやすいという状況があれば、また御意見をいただければ御検討いただくという形をとっていいのではないかなと思いますが、まず名刺はそれぞれつ

くってもらえるということですね。名前を入れていただくことも1つの周知方法である。かつそのほかにこういうふうなものなのか、こんなカードぐらいのものなのか、リーフレットなのかわかりませんが、皆様方が活動しやすいような状況をつくるためにはどういうふうなものが必要だとお考えでしょうか。

(馬場氏)

包括自体が市の事業で、委託を受けていて、なので包括の業務の中に生活支援の役割でやっているという認識でいて、小金井市でいうと普通の包括の業務でやっているようなイメージだったので、通常の名刺のところにコーディネーターと入れていただくほうが、包括の職員でもあって、生活支援もやっているのだなというので、使い分けをすると名刺がわからなくなってしまうというのでしょうか、そういうことが起きるのではないかと思いました。

(高良委員長)

ありがとうございます。

では、名刺関係は皆様方の日ごろの地域包括支援センターの名刺のところに生活支援コーディネーターもつけ加えていただくというような形で修正していただければと思います。

では、周知またチラシ等につきまして何か御意見があれば、こういうふうなものをつくってほしいとかあれば。説明する際に何かあったほうが便利ではないですか。ただ、そんな簡単に、じゃあこんなものとすぐには出ないですよ。ちょっと話し合いをしなければいけないだろうなという気はするのですが、それほど焦ってやることでもないと考え、今回の「生活支援連絡会」のときにも、お忙しいとは思いますが、それでも、こんなものがあればいいよねとそれまでに考えていただいて、その次の1月の第3回の協議体のところでまた本格的に検討するという形をとってもいいのではないかと思います。いかがですか。

ちょっとやっていただく中で、別にチラシに限らず、こういうものがあったら、自分たちの活動をほかの方たちに周知して、関係性をつくって、実際に生活支援コーディネーターとしての役割を果たしやすい環境をつくれるという何らかのものがあれば、ぜひおっしゃっていただいて、せっかくお金を使ってこういうものをつくるわけですから、使えないものをつくっても意味がないので、どういったものが必要なのかというところで御意見をいただければと思います。

では、次回に回すということによろしいですか。

ありがとうございます。

3 その他

次回協議体の開催予定

(高良委員長)

では、最後、4番目のその他に行きたいと思います。次回の協議体の開催予定ということで、これは事務局からお願い致します。

(田村)

次回協議体の開催予定についてお伝え致します。

次回の協議体は平成31年1月25日金曜日の午後2時から開催いたします。

場所は未定です。次回の開催のお知らせをする際にあわせてお伝えさせていただきますので、よろしくお願い致します。

以上です。

(高良委員長)

ありがとうございました。

では、1月、つい最近まで暑いと思っていたら、このままいくとあっという間に年末になってしまいますね。1月25日の2時からということで、皆様、御予定をよろしくお願い致します。

それでは、最後、何かほかに伝えておきたいこととかはありますか。大丈夫ですか。

4 閉会

(高良委員長)

それでは、平成30年度第2回の「生活支援事業協議体」をこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。お疲れさまでした。